様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月２０日現在

機関番号：６４３０２
研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2010 ～2012
課題番号：２２２４２００８
研究課題名（和文）　「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶

研究課題名（英文）　To Which Extent is the “Oriental” Value Judgment Permissible? Acceptance and Rejection of Heterogeneous Thought and Form -In Search of the Limit of Cultural Tolerance in the Global Age

研究代表者
稲賀　繁美（INAGA SHIGEMI）
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：40203195

研究成果の概要（和文）：
西洋世界によって提供されている世界標準の制度設計･価値観の支配する世界秩序にあって、非西洋側は「東洋」を旗印としていかなる代替価値を提案し、その異質性を容認されるものに鍛え上げようとしたか。その経緯を、思想・芸術の領域を中心に、１９世紀後半から百年ほどの時期に限り、多くの研究者をあつめて検討し『東洋意識：夢想と現実とのあいだ』ほかの論文集に集約したほか、内外の多くの学会で成果を発信し、国際学会でも提言を果たした。

研究成果の概要（英文）：
The current World system is established according to the value judgment and design by the West. How the Rest of the world has made effort so as to propose alternatives to this order under the banner of the “East.” The present project aimed at analyzing its limit of acceptability mainly in the field of thinking and arts. Limiting the chronological range roughly from 1850 to 1950, the project conducted researches with the participation of almost 50 scholars and published *The Oriental Consciousness* in Japanese while it successfully put forward the proposals both in the domestic gatherings and missions abroad.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	10,900,000	3,270,000	14,170,000
２０１１年度	7,500,000	2,250,000	9,750,000
２０１２年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総　計	22,600,000	6,780,000	29,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：オリエンタリズム、東洋学、東西交渉史

１．研究開始当初の背景

エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』(1978)は、「東洋」とは西洋世界が自らの利害関心に沿って捏造した虚像であるとして、その政治性を糾弾した。中近東アラブ圏を主要な対象とするサイードの著作はその後３０年近く、学術における西洋中心主義を脱却するうえで、北米を中心に大きな役割を果たしてきた。だが現時点では、サイードの提唱したオリエンタリズム批判そのものが、北米人文学術界の支配的な理念となり、それ自体が西欧アカデミズムに組み込まれ、あらたな学術的基準として世界を席捲する状況を生んでいる。ここには、非西洋世界を西洋世界による抑圧の被害者として規定し、その怨恨を煽ることで、かえって東西あるいは西欧と非西欧の対立を図式的に固定化する欠点が露呈している。

研究代表者は『岩波イスラーム事典』に「エドワード・W・サイード」の項目執筆を依頼され、また『イスラームを学ぶ人たち』への依頼寄稿にあっても『オリエンタリズム』の構想に含まれる問題点への批判に先鞭をつけた。またウンベルト・エーコを中心とする欧州共同体・国際学術組 Transcultura(1988年発足)の創設会員として、思想的な側面並びに造形芸術分野においても、西欧世界とアジア・アフリカを含む非西欧世界との価値観相克の克服をめざす多くの国際会議で提言を続けてきた。1998 年には国際日本文化研究センターにおいて Crossing Cultural Borders, Beyond Reciprocal Anthropology を開催し、その報告書でも、価値観の対峙を土俵に乗せるような学術論争の偽りの対話原理の政治性に疑問を呈してきた。これらの提言は国連大学 United Nations University が 2001 年に組織した国際会議ほかにおいて、活発な議論を招いている。

さらに造形藝術に関する分野でも、研究代表者は、「東洋」という概念規定の恣意性が抑圧され、学術規範と混同されている現実を一貫して批判してきた。その発端は 1986 年にパリのポンピドー・センターで開催された『日本の前衛』展へ理論的批判にあり、近年は 2008 年ロンドンの大英博物館「日本の伝統工藝」展をめぐる公開討論会への招聘に至る。博物館、美術館のような行政組織、美術史・美学・藝術学を含む東洋学という学術上の枠組みの設定、さらにはそれらの学問分野における対象領域の限定という３つの次元に渡って、西欧社会で成立した制度的・理論的な枠組みによって世界が分別され、考察の対象に整序されている。だが、多くの「文明間の対話」や「国際学術交流」は、自らがこうした歴史的・政治的な足枷に囚われていることに無自覚なまま、かえってその反復的再生産と補強に努めている。

２．研究の目的

１９世紀後半以降、とりわけ、第一次世界大戦を経験した西洋世界には、自らの行き詰まりを克服するための可能性を「東洋」に求める一群の思索が登場する。一方、同時代には、「東洋」側からの自らの「非西洋」的な異質性を自覚し、西洋を凌駕する「東洋」観を確立しようとする学術/藝術も現れる。

本研究は、この両者の交差した地点に浮上した「東洋」像に注目する。思想と造形とをめぐる具体的な論争や衝突を吟味しつつ、国際的同質化への要請と文化的異質性への容認との不確定な許容範囲に鬩ぎ合う葛藤と妥協とを司る機構を解明することが目的となる。

３．研究の方法

以下の６件の互いに密接に関連する課題を設定し、分科会形式の調査研究により解明する。

（１）西洋の衝撃に対して「東洋」から発言した知識人・芸術家の思想・行動分析：従来の国別の分析を乗り越え、東アジア・東南アジア・インド・イスラームを横断する。

（２）「東洋からの教訓」を汲んだ西洋の知識人・芸術家の思想と行動の歴史・類型分類：第１次大戦、第２次大戦などの時代状況との関数において主要な論争を位置づける。

（３）美術史、考古学、哲学、思想史などの学術分野における「東洋」の位置づけ：東洋学の編成過程を西洋のみならず、東洋各地の学術制度の整備において把握する。

（４）万国博覧会、国際展覧会などにおける「東洋」規定をめぐる混乱と論争の総括：従来の１９世紀中心の研究を越え、２０世紀前半の植民地博覧会を視野に収める。

（５）近代制度確立における「東西対立」と思想・造形における価値観の相克の分析：美学、哲学だけではなく、経済思想、政治思想、法思想における知見と比較する。

（６）「東洋対西洋」の対比図式に孕まれたジェンダー的偏差の比較文化・方法論的検討：帝国主義体制における支配側女性・被支配側女性の相克の実相に輪郭を与える。

４．研究成果

（１）「西洋の衝撃に対して「東洋」から発言した知識人・芸術家の思想・行動分析」では岡倉天心、潘飛声、李垠、周作人の事例を比較しつつカール・レーヴィットの東洋遍歴と交差させて検討した。とかく国民国家の枠組みに捉われて評価されがちな、これら近代東洋意識の担い手たちは、実際には国境を往還する移動のなかで自己意識を形成し、異質な価値観との接触のなかで、それを鍛錬して、あるいは同時代に指針を提供し、あるいは近代の運命に翻弄され、あるいはそれに世界史的な洞察を与えてみせた。これらの事例の分析からは、従来の国別の分析を乗り越え、東アジアを横断して「東洋意識」の実態を把握するに足りる視野を得た。東南アジア・インド・イスラームを網羅するには、なお次の機会が期待されるが、研究代表者はロビンドロナト・タゴール生誕百五十周年記念国際会議（ライデン）に招聘され、インドネシア、西欧、中国の事例との比較考察の場で日本の情報を提供した。これも本研究の成果のひとつである。

（２）「「東洋からの教訓」を汲んだ西洋の知識人・芸術家の思想と行動の歴史・類型分類」に関しては、国際日本研究センターにおいて国際シンポジウムを開催し、大英帝国での日英博覧会、オズヴァルド・シレンを中心とした北欧での日本美術知識の伝播、ブルーノ・タウトらによる日本建築の再評価ほかの事例を検討する機会を得た。これを通じて、東洋的価値観に関して、第１次大戦、第２次大戦などの時代状況との関数において、従来の専門分野の枠を超えた観点から、主要な論争を相互関係のうちに位置づけ得た。

（３）「美術史、考古学、哲学、思想史などの学術分野における「東洋」の位置づけ」に関しては、朝鮮における民藝の成立、断片性の美学の受容、「日本的」デザイン思想が日本支配下でいかに台湾に伝播したかの研究、日本のシナ学が近代中国でいかに受容されたかを、大村西崖の事績を中心に洗いなおす作業、西谷啓治、和辻哲郎の思想とロシアの神秘主義との比較などの作業を通じて、東洋学の編成過程を西洋内部のみならず、東洋各地の学術制度の整備において把握した。これは、現在当然視されている各専門分野の歴史的・社会的意義を、そのディシプリンの成立事情に遡って再検討するという成果である。

（４）「万国博覧会、国際展覧会などにおける「東洋」規定をめぐる混乱と論争の総括」については、とりわけ佐野真由子が中心となり、従来の１９世紀中心の研究を越え、２０世紀前半の植民地博覧会を視野に収める研究会を軌道に乗せた。1935-6 年のロンドンにおける中国美術展を、1938 年のベルリンにおける日本古美術展と比較検証する試みや、インドにおけるブリテイッシュ・カウンシルの活動を米国やドイツ、フランスと比較しつつ、日本の国際文化振興会の活動を浮き彫りにする作業、さらに朝鮮博覧会における都市計画の推進から戦時期でのヴェトナムにおける文化交流にいたる事例が批判的に検討され、アフリカにおける文化財再評価や文化遺産政策との対比にまで議論を拡大できた。これは今後の文化的自意識の対外発信や、相互認識など、文化外交の将来を設計するうえで指針を与えうる成果をなすものといえよう。

（５）「近代制度確立における「東西対立」と思想・造形における価値観の相克の分析」については、とりわけパーフォーマンス芸術の領域での日米交流や南米にまでひろがる日本前衛舞踏の影響が考察された一方、そうした「東洋」受容の下に潜む思想史的な問題も集中的に審議された。すなわち日本美学の範疇論への問い、範疇を越えた思考様式の西洋哲学における受容の限界、さらには西洋的範疇を横溢する概念枠（たとえば「半」）の有効性と問題性といった論点である。これらの検討を通じて、狭義の美学、哲学だけではなく、経済思想、政治思想、法思想における知見との比較の必要性が明確となってきたが、その具体的な発展は、なお本研究による成果の彼方で追求を続ける必要があろう。

（６）最後に「「東洋対西洋」の対比図式に孕まれたジェンダー的偏差の比較文化・方法論的検討」は、近年その重要性が再認識されている問題であるが、1950 年を下限とする歴史的視野のなかでは、男性支配を当然の前提とする体制や価値観が圧倒的な社会であったことが、洋の東西を問わず再確認され、そのなかで女性性を発揮する可能性および劣位にある文化価値を評価する枠組みがいかに模索されるかといった問題が、「東洋意識」解明の主要な課題であることが再認識された。帝国主義体制における支配側女性・被支配側女性の相克の実相に輪郭を与えるには、なお本研究だけでは限界があり、他の専門領域との協働の必要なことが認識された。とりわけ、欧米のみならず、中国や韓国、東南アジア諸国と比較しても、女性の社会進出の比率がきわめて低いままに留まっている日本社会の現状は、たんにこれを「国際水準」に合わせればよい、という問題ではあるまい。「東洋の覇者」を 1930 年代に任じた極東の島国において、いかなる東洋意識の屈曲が女

性進出遅延の背景にあるのか。社会制度や倫理観の背後にある意識の問題が、解明されねばなるまい。これは、本研究の成果の延長上で、今後達成すべき目標のひとつとなる。

以上をふまえて、以下、いささか巨視的に本研究の成果を総括したい。
世界標準の制度設計・価値観とは、現実には「西洋」を自称する側が支配する世界秩序にあった。それが世界大に形成されたのが 19 世紀後半以降の「帝国主義」の時代であり、「植民地主義」の実相である。非西洋側はさまざまな旗印のもとに、それに対応し、とりわけ１９６０年代からは「アフリカ」や「ラテン・アメリカ」が、そこに対抗しようとする姿勢を顕著にしてきた。本研究はその直前の時期に焦点をあて、「東洋」を旗印としていかなる代替価値が提案され、その異質性がいかにして、またいかなる条件のもとで「西洋」側に容認されたかを検討した。
２１世紀を迎えて、思想界では「脱植民地主義」の呼び声が盛んである。だがその主要な主体は、実際には旧植民地出身民族の末裔として「西側」の拠点に生息する知識人や有力者によって占められる。「国際人」とは、かつての西側支配階級の利権の相続者というべきかも知れない。「国際人」と「現地人」は、いまや白人種と有色人種の区別とは重ならず、むしろ国境を越えた多国籍企業の支配者層と、そこに労働力を提供する被支配者層とに置き換えられた。両者のあいだの階層移動の流動性 mobility はどのような力学に支えられているのか。その背後の下地をなす機構を解明するうえで、「東洋意識」研究は、有効な成果をあげた。なぜならば、東洋側が西洋側に有効な自己主張をする手段、西洋側が東洋側を承認する条件が、歴史的な使命はすでに終えつつも、なかば無意識のまま、なお 21 世紀初頭の世界における物流や人間的移動さらには価値観の流動性を制御する、不可視の法則となっているからである。
中国の覇権、あるいはスペイン語圏の覇権が予測される世界秩序の変貌にあって、極東日本は、社会としても国家としても、なおめざすべき立ち位置を模索している。西欧世界の一員という自己規定も、世界経済における東洋の代表としての地位も、もはや有効性を失いつつある。インドやアフリカに範例をみるようなディアスポラ的知識人と土地に縛られた民衆層との分離が、日本社会にも今後浸透してゆくのか。それとも文化的な一体意識を維持することによって、東洋の一員たる国民・国家意識を将来もなお維持してゆくべきなのか。それはそもそも可能なのか。
『東洋意識：夢想と現実とのあいだ』ほかの和文・英文による論文集では、こうした将来像へも繋がる問題を提起した。それを本研究によって達成された成果として報告するとともに、そこには次なる課題が示されていることを明記したい。すなわち、西洋世界によって形成された世界秩序が有効期限を迎え、なおそれに換わる秩序体系が姿を現さない今日、国家間戦争の代理戦争とは異質な地域紛争が増加し、世界秩序の利潤から締め出された地域での海賊行為、秩序の無法化が進行しつつある。こうした違法行為は、これをかつての世界秩序の倫理によって事前に抑止し、強圧的に鎮圧することは、もはや不可能な趨勢にある。となれば、電子情報や情報産業を含む海賊行為への対応は、あらたな秩序意識の構築と無縁にはなしえまい。
1850 年代から 1950 年代にかけての東洋意識への歴史的考察や理論的批判の延長上に、次なる課題が見えてきている。すなわち海賊行為の世界史的な見直しと、1500 年代から五百年のスパンを視野にいれ、次なる五百年の見通しを描くという課題である。こうした展望が開けてきた点に、本科学研究費助成金による研究の、いまひとつの成果を認めたい。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 稲賀繁美,「日本の美術表現にみる羊」, ソウル･図書出版　ヨルリムウォン,『文化で読む十二支神物語　羊』, 査読有, 単行本, 2013 年, pp.98-109
② 稲賀繁美, 日本の美術表現にみる蛇,『あいだ』, 査読無, 200 号（連載第 93 回）, 2013 年, pp.17 - 23
③ 稲賀繁美, Kegon/Huayan 華厳 View and Contemporary East Asian Art: A Methodological Proposal, *Cross Sections,* Vol.5,The National Museum of Modern Art, Kyoto, 査読有, 5 巻, pp.2-25
④ 稲賀繁美, 韓国に比較文学の「辺境」を踏査する―国際比較文学会　第十九回ソウル大会（Aug.15－21,2010）の報告と反省,『阪大比較文学』, 査読有, 7 巻, pp.164-173
⑤ 李建志, 韓国映画の中の北朝鮮―北朝鮮表象から見えてくるもの, 地域研究, 京都大学地域研究総合情報センター, 昭和, 査読無, 13 巻２号, 2013 年, pp. 238-243
⑥ 藤原貞朗, 展覧会評　シャルロット・ペリアンと日本, ジャポニスム研究, 査読無, 32 巻, 2012 年, pp.49, pp.55
⑦ 藤原貞朗, 〈ホンモノのゴッホ〉は日本に何をもたらしたのか？～昭和 33 年のフィンセント・ファン・ゴッホ展をめぐって, 茨城大学人文学部紀要, 査読無, 14 巻, 2013 年, pp.１, pp.１８
⑧ 橋本順光, 2011 年度第五回例会報告, ジャポニスム研究, 査読有, 32 巻, 2012 年,

pp.31－36

⑨ 橋本順光，書評・松村昌家『文豪たちの情と性へのまなざし』『ヴィクトリア朝文化の世代風景』，比較文学，査読無，55巻，2013年，pp.215－220

⑩ テレングト・アイトル，東洋における修辞学の変遷――日中の修辞学の比較を兼ねて，『人文論集』北海学園大学，査読無，54巻，2013年，pp.61－82

⑪ Shigemi Inaga，"História da arte é globalizada? Um comentário crítico de um ponto de vista Extremo Orientem, Christine Greiner, Marco Souza orgs., *Imagens do Japão,* Annablume, 査読有，2011年，pp.55－85

⑫ 佐野真由子，ロンドン万博へ続く道――一八六一（文久元）年のオールコックの旅と日本の『開国』，明治聖徳記念学会紀要，査読無，復刊第48号，2011年，91-109

⑬ Mayuko SANO, La politique culturelle du Japon, Pour une histoire des politiques culturelles dans le monde: 1945-2011, 査読無，2011年，pp.347-369

⑭ 林洋子，藤田嗣治と銀座をめぐる物語，花椿，査読無，728号，2010年，pp.18－23

⑮ Yorimitsu Hashimoto, Soft Power of Soft Art: Jiu-jitsu in the British Empire of the Earl, 20th Century, Shigemi Inaga (ed.), *The 38th International Research Symposium: Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires* (2011), 査読無，2011年，pp. 69-80

〔学会発表〕（計21件）

① 稲賀繁美，概念の器と，その翻訳について；夏目漱石『夢十夜』の運慶とミケランジェロの詩から；考察にむけての手引きとして，国際シンポジウム「東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再考察（東亞近代知識轉型中的關鍵概念詞）」，2013年3月14日，台北・アカデミア・シニカ

② テレングト・アイトル，東洋における修辞学の変遷――日中修辞学の比較を兼ねて，国際日本文化研究センター共同研究会（稲賀班・第３回），2013年1月26日，国際日本文化研究センター

③ 林洋子，両大戦間パリの挿絵本に見る日本――藤田嗣治を中心に，両大戦間パリの挿絵本文化をめぐって，2012年10月14日，北海道立近代美術館・講堂

④ 戦暁梅，旅の体験がかきたてる美と征服の二重幻影―満洲民藝蒐集の旅再考―，東アジアの文化交流における旅の表象―中日国交正常化40周年記念国際シンポジウム，2012年7月28日，中国清華大学

⑤ 戦暁梅，「コウロギの鳴き声」と「多彩な沃野」に託されたもの―満洲民藝調査展覧会再考―，日本比較文学会第50回東京大会，2012年10月20日，日本大学文理学部

⑥ テレングト・アイトル，日中における修辞学の初期の受容について，東アジア文化交渉学会，2012年5月12日，韓国高麗大学

⑦ テレングト・アイトル，修辞学在東方的変遷――兼日中修辞学比較（中国語で発表），世界中国語修辞学学会第三回年会，2012年10月27日，韓国　仁川大学

⑧ Shigemi Inaga，“Yashiro Yukio (1890-1975) between the East and the West in Search of an Aesthetic Dialogue,”， Aesthetics in the World, First Polish-Japanese Meeting （招聘講演），May 23-24, 2011, Cracow, Poland

⑨ Shigemi Inaga，“Rabindranath Tagore and Japan ： From Bengali Art Renaissance to Criticism of Japanese Nationalism'", Asia after Tagore, the Legacy of Rabindranath Tagore: A Two-Day International Seminar organized by the Friends of the Kern Institute (VVIK) (招聘講演)， Sep. 23-24, 2011 University of Leiden, The Netherlands

⑩ Shigemi Inaga，“Reception of Hokusai in the West: from Philippe Burty to Henri Focillon (1862-1925) with special focus on “Manga Jasienski”, Symposium Hokusai in context Asia, （招聘講演），October 14-15, 2011, Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, BRD

⑪ Shigemi Inaga，“Fracturing the translation or translating the fracture? Questions in the Western Reception of Non-Linear Narratives in Japanese Arts and Poetics"，Fractured, Transformed Travelling Narratives in Writing, Performance and the Arts Colloquium The Pinter Centre, Department of Drama, Department of English & Comparative Literature at Goldsmiths, the BCLA and the AILC/ICLA, September 16-17, 2011, Goldsmiths,

University of London

⑫ 佐野真由子，「『万国博覧会の日本』を誰から見るか―1862年第2回ロンドン万博を事例として，新潟大学19世紀学研究所シンポジウム（招待講演），「『万国博覧会の日本』を誰から見るか―1862年第2回ロンドン万博を事例として，新潟大学19世紀学研究所シンポジウム（招待講演），2011年11月12日，新潟大学

⑬ 林洋子，アトリエの画家・藤田嗣治，石橋美術館・美術館講座，2010年10月9日，石橋美術館（福岡）

⑭ Shigemi Inaga，“Paul Cézanne in Japan: Between Revolutionary and Oriental Sage - Appreciations, Impacts and Collections”，*Russia and the Global Cézanne Effect, 1900-1950*, International Academic Conference devoted to the Global Influence of Paul Cézanne, March 28, 2010, Boris Yeltsin Presidential Library, Saint-Petersburg, Russia

㉑ Yorimitsu Hashimoto, Jujitsu and Bushido in the British Empire in the early 20th century, The 38th International Research Symposium: Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires, 2010年11月8日，国際日本文化研究センター

〔図書〕（計　6件）

① Artistic Vagabondage and New Utopian Projects, 2011; 2012, Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Vision of “Asia” under the Colonial Empires, IRCJS, 2011.

② 稲賀繁美（編著），ミネルヴァ書房，『東洋意識　夢想と現実のあいだ 1887-1953』，2012年，pp.594

③ Shigemi Inaga 稲賀繁美（編著），（増刷訂正版第2版）*Artistic Vagabondage and New Utopian Projects: Transnational Poïetic Experience in East-Asian Modernity (1905-1960) :Selected Papers from the XIXth Congress of the International Comparative Literature Association, Seoul, 2010, Expanding the Frontiers of Comparative Literature, August 15-21, 2010, Cung-Ang University, Seoul, Korea*（増刷訂正版第2版）2012年，pp.138

④ 林　洋子編・著，柏書房，『美術家のフランス体験Ⅱ　黄金の1920年代』（ライブラリー・日本人のフランス体験　第12巻），2010年，788頁

⑤ Shigemi Inaga, International Research Center for Japanese Studies, *The 38th International Research Symposium: Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires*, 国際日本文化研究センター，2011年，pp.388

⑥ 瀧井一博，中央公論新社，伊藤博文―知の政治家―，2010年，376頁

〔その他〕

ホームページ等

稲賀研究室

http://www.nichibun.ac.jp/aurora/inaga/index.php?2010-2013%20Nichibunken%20IRCJS

６．研究組織

(1)研究代表者

稲賀繁美（INAGA SHIGEMI）
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：40203195

(2)研究分担者

フィスター・パトリシア（FIATER PATRICIA）
国際日本文化研究センター・海外研究交流室・教授
研究者番号：70310779（H24: 連携研究者）

瀧井　一博（TAKII KAZUHIRO）
国際日本文化研究センター・研究部・准教授
研究者番号：80273514（H24: 連携研究者）

佐野　真由子（SANO MAYUKO）
国際日本文化研究センター・海外研究交流室・准教授
研究者番号：50410519（H24: 連携研究者）

テレングト・アイトル（TERENGUT AITOR）
北海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：10316234

藤原　貞朗（FUJIHARA SADAO）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：50324728

橋本　順光（HASHIMOTO YORIMICHI）
大阪大学大学院・文学研究科・准教授
研究者番号：50324728

林　洋子（HAYASHI YOKO）
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：30340524

戦　暁梅（SEN GYOUBAI）
東京工業大学・外国語教育センター・准教授
研究者番号：00401521

李　建志（REE KENJI）
関西学院大学・社会学部・教授